

英語教育

ENGLISH CLASSWORK

Vol. 63 No. 3 2011

主幹 新里 眞男

巻頭言

「小・中連携」の気にし過ぎは「？」

静岡大学教授 ● 白畑 知彦

小学校での外国語活動が導入された昨今、種々の英語教育学会、雑誌・図書などで「小・中連携」が謳うたわれています。そこで、今日はもう一度考えてみましょう、「英語教育の小・中連携って本当に必要なの？」と。まず、「何をすると小・中連携になるのか」という問題があります。これは実に根源的で難しい問題ですね。「中学校の先生が小学校の外国語活動の実態を把握する」という意味なのでしょうか。それとも、「小・中の先生が互いに何か協力して英語教育を盛り立てていく」という意味なのでしょうか。

他の教科(国語や数学など)は小・中連携を意識しているのでしょうか。教科教育学を専門とする同僚にお聞きしたところ、全員から「特別何もやってない」との回答を得ました(わずか5名からですが)。なぜやっていないのでしょうか。それはやる必要がないからだと思います。中学校では中学校の教科書を使って授業をするわけで、それに沿って教えていけばよいからです。小学校での内容が中学校で再度出てくるでしょうが、教師はその都度生徒の理解度を確認していけばよいことです。教えていけば、目の前の生徒がどの程度の知識を持っているかすぐにわかると思います。生徒の知識・学力不足を小学校の教育のせいにする中学校の先生はいらっしゃらないのではないのでしょうか。

英語も同様で、どの程度の英語能力を身につけて中学に入学したか、1か月もすれば把握してしまうでしょう。変な発音が身につけてきているとか、文法がムチャクチャだとか不平をおっしゃる先生がおられますが、そういうことを言い出したら、大学の英語の先生は中学と高校の英語の先生に文句を言うことになります。どうして仮定法がわからないんだ、どうして/v/の発音もできないんだってね。しかし、こういうことに目くじらを立てていても何ら生産的ではありませんし、大学でもう一度教えてあげればよいことです。「小・中連携」とことさら意識し過ぎることはないと思います。それぞれの先生の意識の問題であり、目の前の生徒をしっかりと観察していれば大騒ぎするほどのことではないと思います。

My Projectの特長と効果的な活用法

東京国際大学教授 新里 眞男



1. はじめに

平成20年3月に改訂された学習指導要領による授業がいよいよ来年度から始まる。この改訂には、授業時数や指導語数の増加という特徴もあるが、やはり4技能の「総合的な指導」と「4技能の統合的な活用能力の育成」が最重要であろう。

4技能の「総合的な指導」とはどんなものか、そして「統合的な活用能力」とは何を指すのか。これらは、一見、きわめて当たり前のことのように思える。しかし、実際に教室の中でどのように指導し、育成すべきかを考えると悩ましい。

文科省関係者は、「4技能の総合的な指導」とは、4技能をバランスよく指導するという意味であり、「4技能の統合的な活用能力」とは2つ以上の技能を有機的に関係づけて実際のコミュニケーションができる能力を育成することであると説明するが、やはり、もう少し具体的な指針が欲しい。

2. 総合的な指導と統合的な活用能力とは

4技能の総合的な指導を行うためには、教師が日常的に生徒の4技能それぞれの進捗状況を把握し、それを教室での言語活動に反映する必要がある。4技能のバランスは50分の授業の中である程度意識することも大切だが、それよりPROGRAM(課)ごと、学期ごと、年間を通してより大きなくくりで考えることも大切である。

実際には4技能の「統合的」な育成の方がより注意が必要である。50分の授業で4技能のそれぞれを10分ずつ指導しても、相互に有機的な関連がなく独立に活動を行うのであれば、「統合的な活用能力」は身につかない。テーマや活動形式の観点から自然と複数の技能を並行的に、または、段階的に使うような活動を設定する必要がある。4技能の統合的な活用能力をつけるには、それぞれ4技能を統合的に使わざるを得ない活動を設定するしかない。

3. Sunshineでの活動例

改訂されたSunshineでは、4技能の「総合」や「統合」がしっかり意識されている。通常のPROGRAMでも、リスニングから入り、パターン練習した後、簡単なスピーキングに移行し、次に「本文」についてのリスニングやスピーキング、リーディングを行い、最後に基本表現を使って本文の内容に対応した文を書かせるというライティングを行うことにしている。つまり、通常の課であっても、4技能の「総合」や「統合」が意識されているのである。

また、POWER-UPシリーズでは、4技能のそれぞれにフォーカスを置き、それらの一層の拡充を図ろうとしている。一見すると単独の技能を伸ばす仕組みのように見えるが、実は4技能相互のバランスを考慮した指導を行うことがねらいなのである。

4. My Projectの統合的な活動

しかし、今回のSunshineの最も顕著な特長はMy Project(これ以降MPとする)にある。例として1年の2学期に扱われる「人を紹介しよう」というMP 2(My Projectは1年から3年までに3つずつ全部で9つの活動があるが、それぞれ通し番号がついている)を取り上げてみよう。

ここでは、まず、人を紹介する2つのスピーチを聞くことから始まる(リスニング)。次にその2つのスピーチの原稿を見て、内容を確認する活動(リーディング)が行われる。そして、サンプルの人物紹介スピーチを参考にして、自分のスピーチ原稿を書くことになる(ライティング)。それをペアの相手やクラスの前で発表する(スピーキング)。このように、人物紹介というテーマに基づいて、4技能が統合的に活用されているのである。どの技能に特化してというより、生徒たちは、自分のスピーチ作成という大きなプロジェクトに向かっ

て、自然に4技能を活用することになる。このような活動こそが、4技能を統合的に活用するコミュニケーション能力を育成するための典型的な言語活動であろう。

5. MPの工夫

従来、スピーチの指導と言えば、スピーチのサンプルを読んで理解し、その中のいくつかの文について語句を入れ替え、自分になぞらえた文にするだけの活動がほとんどだった。これでは、各自が言いたいことを言うスピーチではなく、単なる「英借文」レベルに留まっている。つまり、新学習指導要領の「書くこと」の指導事項である「(エ)身近な場面における出来事や体験したことなどについて、自分の考えや気持ちなどを書くこと」に対応した実践にはなっていない。まして、「(オ)自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように、文と文のつながりなどに注意して文章を書くこと」という指導は不可能である。

「文と文のつながり」に注意するためには、表現したい内容を産み出し、それを個々の文で表現し、それぞれの文の配列を考え、適宜soやthenなどの接続詞や副詞を使って全体として一貫性のある文章にまとめる作業を実際に行わせる必要がある。ひとまとまりの言いたい内容があり、それを複数の文で一貫したメッセージを表現するからこそ、文と文のつながりを考える必要が生じるのである。

この作業を具体化しているのが、たとえばMP 2の「人を紹介しよう」なのである。以下に、このProjectで示されている工夫を箇条書きしてみよう。

- ①スピーチの内容を構想する段階の作業として、マッピングを取り入れている。
- ②マッピングで得られた情報から必要なものを選択し、それらを既習の英文で表現する。既習の文はすぐに見つけられるようにレファレンス機能が充実している。
- ③自分の伝えたいことに重点を置きながら、文と文との相互の関連に注意を払い、効果的なつながりごとばを使いながら並べる。
- ④これらを通して、スピーチ作成の実際のなブ

- ロセスを体得できる。
- ⑤スピーチの典型的な様式についても体得できるように、ある程度の枠組みが提示されている。

これらの目に見えるSmall Stepsを踏んだスピーチ指導こそ、新学習指導要領の「話すこと」の指導事項である「(オ)与えられたテーマについて簡単なスピーチをすること」に対応した指導ができると考える。

6. MPの特長と活用法

前述のようにMPは1～3年に3つずつ全部で9つの活動があるが、すべてが上記のようなspeech型ではない。他にdialog型(MP 3「どんどん質問しよう」、MP 4「対話をつなげよう」、MP 7「有名人にインタビューしよう」)や、debate型(MP 6「賛成意見や反対意見を言おう」)がある。

どのタイプのMPであっても、次の4点の特長は共通である。

- ①生徒自身に自分の伝えたいことを考えさせる。
- ②それを既習の文と結びつけさせる。
- ③それをペアやクラス全体に発表する。
- ④自分のメッセージを伝えるために英語を使うことで自己表現につながる英語力をつける。
- ⑤4技能のうち2つ以上を有機的に関連させた活動である。

最後に、このMPの活用法について述べる。MPは3学期制の学校では期末考査の時期に当たるように設定されている。このため、MPを各学期の学習や指導の総仕上げ活動として扱い、各学期で評価を行う際の主たる「評価活動」として活用することができる。ぜひ大いにご活用願いたい。

これからの英語入門期指導

北海道北見市立留辺蘂中学校教諭 高橋 良幸



1. はじめに

学習指導要領の改訂に伴って、小学校の外国語活動が正式に始まった。これまでの生徒にとって英語は中学生になってから勉強するものであったが、これからはすでに英語に慣れ親しみ、ある程度の知識と技能を持って中学校に入学してくる。

中学校では、これからも「英語」という教科を一から学習することに変わらないが、我々中学校の英語教師も変化に応じて指導方法を考えていかなければならない。中学校英語の入門期は重要であり、①小学校英語の成果を確認する、②スムーズに中学校の英語学習に入っていく、特にこの2つに配慮して授業を進めていく必要がある。

今回は中学校英語のスタートに着目し、新Sunshine 1のLet's Startから新たにPROGRAM 1として設定されたアルファベットの指導まで、自分なりに考えていることを紹介したい。

2. 中学校の英語学習に向けての準備

現行版と同様に、Let's Startが新しいSunshineでも同様に設定されている。このLet's Startは、英語の学習を始めるにあたっての準備段階のような位置づけであるが、新Sunshineでは小学校英語を前提とした中学校英語のスタートとして、さまざまな工夫・配慮が施されている。

(1) 文レベルの活動(Let's Start ①・③)

Let's Start ①, Let's Start ③に見られる、「空欄になっている吹き出し」はその1つである。これまでのように英語の挨拶や自己紹介を一から教えるのではなく、小学校で英語に慣れ親しんできた子どもたちが自由に発想し、自由に表現できるようになっている。これからの新入生は、“How are you?”の問いかけに対し、“I'm fine.” “I'm great.” “Not so good.”など複数の表現で答えてくることが予想される。p.7の初対面の友だちに名前を言って挨拶をする場面でも、“I'm ~.” “My name is

~.”の2通りが考えられる。さらに、名前以外のことを考えさせてもおもしろい。“Where are you from?” “Are you my classmate?”など様々な表現が出てくるかもしれない。

教師は生徒から多くの表現を引き出し、それを評価してあげればよい。そうすることで、生徒は中学校の英語にスムーズに入っていくことができ、教師は生徒がどのようなことができるのかを知ることができる。

毎年、初々しい新入生との最初の授業は、英語で挨拶を交わし、お互いに英語で自己紹介をしてきた。これからはLet's Start ①・③を通して生徒の自由な発想を引き出しながら、型にはまらない、生徒それぞれの自己紹介にしてみたいと思っている。

(2) 語レベルの活動(Let's Start ②)

『英語ノート』では実に多くの単語を扱っている。名詞が中心になるが、カテゴリーに分類してみると、「数」「色」「動物」「文房具」「教科」「月・曜日」「食べ物」「スポーツ」「楽器」「国」「職業」など様々である。これからの1年生は小学校で多くの単語に触れて入学してくる。名詞中心だが、語彙が多いことはコミュニケーション活動を行ううえでたいへん有効である。

新SunshineのLet's Start ②に出てくる単語は、生徒が小学校で学んだ単語のほんの一部である。先に述べたことと同様に、生徒の英語学習への意欲を喚起し、抵抗なく中学校の英語学習を始めるためには、さまざまなアクティビティを通しながら教科書に載っていない単語も引き出してよいだろう。教師が驚くような単語が出てくるかもしれないが、それを十分評価してあげればよい。生徒は英語学習に対して意欲を持ち、教師は生徒の語彙力を把握できる。

3. 中学校英語学習のスタート

(1) 単語の発音指導(Let's Start ④)

Let's Start ④では、①・②・③とは違い、中学校の英語学習スタートの準備に入る。ここではLet's Start ②のように小学校で出てくるような身の回りにあるものの単語を扱っているが、「発音に気をつけて言ってみよう」「英語らしく発音しよう」というねらいはLet's Start ②とは明らかに違う。小学校では発音にはこだわらず、英語を使った活動への意欲を重視しているから、「発音に気をつけて」というねらいは中学校での英語教育のはじまりだと言える。

ここでは教科書のねらいの通り、発音にこだわって指導することが大切だ。後にアルファベットを学習するときに、自分たちが発音したものが文字で表せることを実感させるためである。無声音、有声音、破裂音、摩擦音などを強調しながら、楽しく練習させたい。ALTの協力を得ながら練習するのもおもしろそうだ。まだ文字は使わないが、耳と口を大いに使いながら正しい発音をしっかりマスターさせたい。

後のアルファベット指導につなげるためには、1音節の単語を取り上げて、集中的に習得させるのがよい。Let's Startからピックアップすると、bed, dog, cat, bag, box, pen, deskなど数えるほどしかないので、『英語ノート』に出てくる単語を取り上げてよいと思う。後に文字と発音の関係を学習する際、数が多いほうがルールを帰納的に学ぶことができる。

(2) アルファベットの指導(PROGRAM 1)

中学校英語の大切な指導事項の一つとして「発音指導」があげられるが、その基本となるのがアルファベットの指導である。アルファベットの学習は、名前と順番を覚え、大文字と小文字を書けるようになることだけではない。英語の発音の基本を学ぶ重要な学習である。新Sunshineから、アルファベットはPROGRAM 1として位置づけられた。「中学校の英語学習のスタートはアルファベットから」ということを生徒に意識づけるためにも、1つの単元として扱うのはたいへん意義のあることだと思う。

アルファベットの名前、順番などはどの教科書でも扱うが、アルファベットの「音」についてはローマ字の延長で曖昧なままスタートすることが多いのではないだろうか。pp.14~15のチャレンジ①・②・③はたいへんよい。それぞれのアルファベットには「名前」と「音」があるということをしつかり認識できる。「子音」と「母音」それぞれ単体での音を十分練習し、「子音」と「母音」の組み合わせでできる音につなげていきたい。そして再びLet's Start ④で扱った単語に戻ることで、生徒たちは文字と音の関係の理解を深められるだろう。「音」を学ぶことは、単語のスペリングを覚えていくためにも必要な学習である。

フォニックスのルールはたいへん多いため、少しずつ学習していくことになるが、初期の段階で「音読み」のみで発音できる単語を十分練習することは、英語の発音の基本を身につける重要な学習活動である。

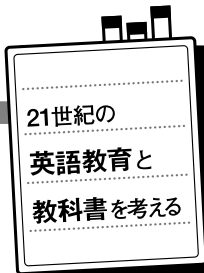
4. おわりに

小学校英語が始まったことによるメリットは多くあると思うが、デメリットもある。その1つが、スタートの段階ですでに「英語が嫌い」「英語が苦手」と感じている生徒も存在するという点である。そのような実態を踏まえてどのように授業を作るかがこれからの大きな課題の1つと言える。

生徒たちは週1時間の「活動」として英語に親しんでくる程度なので、小学校英語を前提として授業を進めることはできない。逆にその成果を生かすことなく今まで通り進めることもナンセンスである。目の前の生徒の実態を十分把握して授業プランを立てていくことがやはり必要だ。その点は、今までもこれからも変わらずに大切なことである。

参考資料

- 北原 延晃.(2010).『英語授業の「幹」をつくる本』ベネッセコーポレーション
- 菅 正隆他.(2009).『小学校英語わいわいガヤガヤ玉手箱』開隆堂出版
- 『英語教育 Vol.63-2』.(2011). 開隆堂出版



教科書をもっと計画的に活用した授業を!



東京都北区立王子桜中学校教諭 根本 誉

1. はじめに

新学習指導要領で重視している、4技能の総合バランスがとれた「総合的活動」や2つ以上の技能を関連づける「統合的活動」を行うためには、今まで以上に単元のねらいをはっきりとさせ、各授業のつながりを明確にし、基礎・基本を定着させることが必要となるのではないだろうか。そのような意識のもと、どのように教科書を活用するかを新しいSunshine 2のPROGRAM 6を例に、私なりに考えてみた。

2. 授業の全体像をイメージする

(1) 単元のねらいと指導の流れを明確にする

はじめにPROGRAM 6のテーマ、A Work Experience Programについて考える。担当している生徒にとって効果的かどうかポイントである。本校では「職場体験」は2年生の主要な行事の1つだ。生徒は様々な職場で体験をし、体験発表会も行う。それを英語でも語れるようにさせたい。そのような思いで、次の2つのねらいをたてる。

- ①職場体験について英語で質問し、答えることができる。
→単元の最後に統合的な活動として「職場体験インタビュー発表会」を行う。
- ②不定詞の用法を理解し、不定詞を用いて応答ができる。

(2) 単元のねらいを達成するための指導計画をたてる

全体のねらいと、最後の活動を決めたら、言語材料や本文の内容を整理し、授業時数を決める。無理なく効果的に最後の活動にもっていくための流れを計画する。

【単元の内容】

section	言語材料	本文内容/形式
6-1	不定詞 (名詞的用法)	由紀の保育園での体験 / Dialog

6-2	不定詞 (副詞的用法)	武史のスーパーでの体験 / Dialog
6-3	不定詞 (形容詞的用法)	桃子の工場での体験 / Monolog

【指導計画例】全9時間扱い

時数	section	指導内容
1	6-1	不定詞(名詞的用法)の理解、習熟
2	6-1	由紀の保育園での体験の内容理解、音読(ペア暗唱) ◎Dialogの理解・音読を通して様々な表現方法をinputする。
3	6-2	不定詞(副詞的用法)の理解、習熟
4	6-2	武史のスーパーでの体験の内容理解、音読(ペア暗唱) ◎Dialogの理解・音読を通して様々な表現方法をinputする。
5	6-3	不定詞(形容詞的用法)の理解、習熟
6	6-3	桃子の工場での体験の内容理解、読解、音読
7		6-1と6-2のペア暗唱活動 不定詞の3用法のまとめ
8	インタビュー練習	ペアを組み、セクション6-1 or 6-2の一方を選択。本文をもとに生徒自身の職場体験インタビューを考え、練習させる。
9	インタビュー発表	制限時間を2分~2分30秒とし、ペアごとに職場体験インタビューを発表させる。

3. Small Stepを大切にしたい授業の段取り

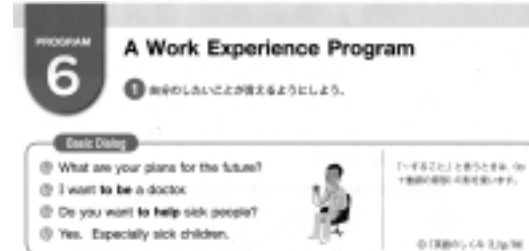
英語で意見や考えを発信するための手順としてinput → intake → outputの3つの段階を踏むように言われている。しかし、inputを十分せずにパターン・プラクティスなどのintakeをしたり、逆にinputしてからすぐにスピーキング活動などのoutputをしてしまうということが、よくあるのではないだろうか。生徒がoutputできるように生徒に合ったinput活動、intake活動を準備したい。そのために私が大切にしていることの一部を紹介したい。

(1) Oral Introduction(input活動)

新しいSunshineでは新言語材料の「基本文」は4行(1年生のみ2行)の対話形式で示されている。これはOral Introductionを行う際に、話を広げながらくり返し「基本文」をinputすることができるという点でたいへん使いやすいと思う。

今回はこの「基本文(基本対話)」を使って言語材料を導入する方法を考える。

PROGRAM 6-1



※黒板には、2年生の巻末資料「いろいろな職業」を拡大したものを貼っておく。

- ①生徒に身近な話題から入る。今回は職場体験。
Last week was a special week for you. Why?
- ②生徒と職場体験についてやりとりしながら、視覚資料を用いて様々な職業名を導入していく。
S1, did you work as a firefighter?
- ③教師自身の経験を話しながら新言語材料を導入していく。
Well, when I was a junior high school student, I wanted to be a pilot. I wanted to fly. I also wanted to go to many countries.
- ④生徒の将来の目標についてたずねる。
S2, what are your plans for the future?

このような手順で、「今日は不定詞の名詞的用法を学びます」などと唐突に始めるのを避け、生徒に身近な状況から自然に言語材料を導入したい。

(2) 音読から暗唱へ(intake活動)

intake活動として教科書本文の暗唱は非常に効果的だ。先日行った授業アンケートの中で9割以上の生徒が暗唱を「力がつく」活動として選び、「脳がフルに働くような感じでよかった」等のコメントをしている。私の授業における教科書本文を用いた音読、暗唱指導の手順を紹介する。

本文の導入、新出単語の確認、本文の内容説明などを終えた後、①Chorus→②Buzz→③Paced→④Part→⑤Read&Look-up→⑥Shadowing等の(またはいくつかの)音読をした後に、本文を暗唱させる。暗唱の指導は職場の先輩教師に教わったアイデアに工夫を加えて行っている。

- ①ペアを組み、机をつける。
- ②各自の分担を決める(S1: Ms. Wood / S2: Yukiのように)。
- ③制限時間(1ページあたり4分程が適当)を与え、練習させる。
- ④起立させ、1分~1分30秒の制限時間を与え、適度な速さで暗唱させる(必要に応じて教科書を見てもよしとする)。終わったら着席。

これを次の授業の始まりなどでも復習として行い、帯活動として実施することで、最終的にはsection 1~2の本文をまとめて暗唱できるようになる。暗唱できる頃には、パートナーの分担している英文まで自然と覚えているのがペア活動ならではの利点といえる。

(3) 職場体験インタビュー発表への準備

暗唱した本文の一部の語句を入れ替え、インタビュー原稿を作成する。入れ替える語句に下線を引いた次のようなワークシートを配付する。

Ms.Wood: Yuki, where did you work?
Yuki: I worked at a nursery school near the soccer stadium.
Ms.Wood: Really? What did you do there?
(PROGRAM 6-1 本文より)

ペアを組み、パートナーと助け合いながら、ワークシートをもとに生徒のオリジナル英文を書かせ、インタビュー活動の発表練習をさせる。

4. おわりに

今、目の前にいる生徒たちの力を伸ばすために、生徒の気持ちや現状を把握したうえで、彼ら全員が所持している教科書を「もっと計画的に活用していく」という姿勢を常に持って、今後も試行錯誤しながら実践を重ねていきたい。



MISHIMA CARPET

徳島県美馬市立三島中学校教諭 福田 恵



1. はじめに

「英語が話せたらカッコいいな」と誰もが思っている。その思いに応えるべく、日々の授業の言語活動や学習形態を工夫することを心がけている。そのために、教師ができるだけ英語で話し、英語学習の雰囲気を作り「英語で話すこと」への意欲を高めている。そして、基礎的・基本的な知識・技能の習得を図るために、音読、暗記、暗唱、クイックQ&Aなどをくり返す。それらを授業の最初の帯活動や各単元のまとめ、複数の単元のまとめとして行っている。

本校では生徒たちの発表はすべてクラスメートの前に行うことにしている。それは「MISHIMA CARPET」と呼ばれ、生徒たちはとても楽しみにしている。音読はもちろん、レシテーション、創作スキット、プレゼンテーション、スピーチ、歌と踊り、英語劇、ミニ・ミュージカルなどを発表する。その中で、生徒一人ひとりの個性や考えを生かし、自尊心や他者を尊重する意識を育て、クラスメートから学び合う環境作りを大切にしている。また、生徒の作品は英語作品集として文集やDVDにまとめられ、生徒に配っている。ここでは、1年生の3月に行った「My Favorite Person or Thing」のスピーチ活動を報告したい。

2. スピーチ原稿を書くために

各セクションでターゲット文を学習した後、新しい文法事項を使って、主語や動詞などを変化させて3文作り、「自己表現ノート」に書く。教師は必ず点検し必要があれば正確な文に直す。それを発表し、クラスメートのよい例文や自分もそういうふうになりたいと思う表現を自分の自己表現ノートに書き込む。そうすると1年間で相当数の文が書き込み、スピーチやスキット作りの際、そ

から参考となる文を選択したり応用させたりして使うことができる。このノートに書かれた内容は「話すこと」、「書くこと」のアウトプット活動の基礎・基本の定着に大きな役割を果たしている。また、各セクションで自己表現文を作るときには辞書の使用を促し、必要ときに必要な単語を調べて語彙を増やしていく指導も積極的に行っている。

3. よい発表を行うために

スピーチの発表に向けて、原稿を書き、発表する練習に時間をかけることは当然である。しかし、原稿作成、発表するときの態度や注意事項、暗記に至るまでの生徒の負担はどうであろうか。一度にたくさんすることを注意しながらの発表となると、なかなか本番で最高のでき栄えにはなりにくく、教師の指導も行き届かない。そこで、原稿作成と同様に、スモール・ステップで英語の発音・音読練習の徹底、レシテーション・スキットなど皆の前で発表する機会をたくさん与え、それぞれの発表ごとに気をつけるべきことの指導を積み重ねている。そうすれば生徒の負担も減り、話し手も発表がしやすく、聞き手も集中して聞くことができる。

「MISHIMA CARPET」では、たくさん話をさせる工夫として、音読やスキットなどの発表後に聞き手の生徒たちが評価を行い、発表者に対してコメントを述べる。自分が頑張ったことに対してのクラスメートからのほめ言葉や励ましは大きな喜びになっている。また、聞き手ももっと知りたいことや疑問があれば質疑応答も行う。それが次の発表への意欲・動機づけになり、さらに工夫された発表へとつながっている。

4. スピーチの発表とその後のコメント・Q & A スピーチ原稿例

I love Piglet

Hello, everyone. Do you know him? His name is Piglet. I'll tell you about him.

He is a stuffed pig. He has a small body. He lives in a tree. It's an old house. He has a great friend Pooh. Which do you like Piglet or Pooh? Piglet is a coward. Because he doesn't have self-confidence. But he became brave. When he helped his friends, I love him so much. I think he is cool. Don't you think so?

Thank you for listening.

発表後のコメント・Q & A

(S: Speaker L: Listener T: Teacher)

S: Do you have any comments or questions?

L1: You spoke clearly.

L2: Your pronunciation was very good.

L3: You were easy to understand.

L4: Your voice was very good.

L5: You spoke at a nice pace.

L6: I liked your smile.

L7: Your gestures were good.

L8: Your speech was interesting.

(周囲の生徒数人がLの各コメントに対してI think so.やI agree with L1.などと言う。その発言に続いて、別の生徒がMe too.などと言う。)

L9: Are you nervous?

S: Yes, I'm very nervous.

L9: Don't worry. I enjoyed your speech.

S: Thank you.

L10: How old is Piglet?

S: I'm sorry, but I don't know.

L11: How many Piglet's goods do you have?

S: Pardon?

L11: How many Piglet's goods do you have?

S: Well... I have about thirty.

L12: S, I like Piglet, too. But I like Pooh very much. He is cute. Don't you think so?

S: Well, I think so, but Piglet is cute and cool. Is that all?

L: Yes.

T: Give her a big hand.

5. 評価について

教師は発表の事前に文法や内容が適切であるかどうかを確認し、必要があれば指導している。だからここではコミュニケーションへの関心・意欲・態度として、「自分の考えを伝えようとする意欲があるかどうか」、また「スピーチを適切な声量や発音・明瞭さで話すことができているか」を外国語表現の能力として5段階で評価した。

また聞き手の生徒どうしは「声量」「アイコンタクト・ジェスチャー」「発音」「内容」などの各項目に合わせて3段階で評価を行い、英語でコメントを記入した(これは聞き手もよいスピーチの仕方を意識するのに有効である)。次に話し手に質問文を作る。生徒たちは「MISHIMA CARPET」に慣れているので、即興で英語を使ってコメントや質疑応答をすることができるが、コメント欄は後で発表者に配られ、クラスメートからのコメントや質問文をじっくり読んで反省を行っている。その中にはほめ言葉のコメントも多いが、「もっと～した方がよいのでは」という意見や提案なども書かれている。そして、それを生かして次の発表の参考にしている。また、クラスメートからの温かいコメントは生徒どうしのつながりやよりよい人間関係作りに大きな役割を果たしている。

6. おわりに

言葉は人と人の心をつなぐものである。言葉の学習を指導する者として、教室で学ぶ中では温かい人間関係に支えられた言語活動を展開していきたい。英語力も人間関係形成能力も小さなことの積み重ねからでき上がる。生徒どうしが認め合い支え合う。そのつながりは教師の想像を超える素晴らしい能力として発揮されることがある。そして言葉をつなぎ、心をつないでいく言語活動が思考・判断・表現力を磨き、即興で英語を話す力につながると思う。間違ふことを恐れず積極的に英語で会話をし続け、正確な英語を書くことで確実なものにしていきたい。今後も生徒が主体的に「言いたい! 聞きたい! 読みたい! 書きたい!」とわくわく感動するような授業を実践し続けたい。



入試に出る蔵君

—入試英作文対策プリントの作成—

岩手県矢巾町立矢巾中学校教諭 石積 康弘



1. はじめに

新学習指導要領では「まとまりのある英語」が4技能において重視されています。また、全国の公立高校の入試問題を見ると、「5文で書きなさい」などの文数による指示が減り、「25語以上で書きなさい」というような語数を指示する傾向に変わってきました。大学入試も同じ傾向です。それも「まとまりのある英語を書くこと」につながっています。では、まとまりのある英語を書く力はどうすれば高まるのでしょうか。

昨年度は3年生を担当しました。3月11日の「東日本大震災」とともに経験した生徒たちです。一度はあきらめた卒業式でしたが、他校の体育館をお借りして卒業式が実施できました。

岩手の三陸はまだ復興の途中。全国の先生方も、どうか忘れずに、心の中で応援し続けてあげてください。「忘れないこと」も温かい支援になるのだと思います。

今回はその生徒たちに7月から卒業まで配付し続けた入試対策プリント「入試に出る蔵君」について述べたいと思います。

2. 130枚の英作文問題シート

「入試に出る蔵君」は「出る蔵君1」から「出る蔵君3」までの構成となっています。「1」では主に2年生までに習った文法事項を復習するための英作文。「2」では、やや応用的になり、場面や状況に適した表現を書く問題。「3」では会話文の読み取りや長文の読み取りの中で、自分の意見や考えを述べる、入試問題と同レベルの問題です。問題はすべて私のオリジナルです。7月から毎日配付し、3月の時点で130枚に達しました。

3. 活用の仕方

宿題ではなく、3年生165名全員に毎日配付しました。シートに書かせるよりも、ノートに解答を書いて、何回もくり返すことを奨励しています。

定期テストや実力テストに向けた予想問題なども取り上げるので、生徒は宿題でなくても、かなり丁寧に取り組みます。そして、問題の質が高いと「これをくり返せば点数が上がる」と実感し、「出る蔵君」を親しみながら解き、宝物のように大切に生徒が増えました。授業では特に扱わないため、放課後や昼休みに質問に来る生徒もたくさんいます。他校の先生方でも「欲しい」と言う先生には、全130枚をコピーしてあげました。私が代表となっている研究会(Big River)を通じて、岩手県内にもかなり普及したと思います。

4. 継続は力なり

実力テストの平均点も、他校に追いつき、追い越し、さらに入試本番まで学力の向上は止まりません。岩手県公立高校入試の英語の平均点が100点満点中約40点の中(岩手は全国的に見ても難関です)、生徒たちは県平均よりも相当高い得点を獲得し、多くの生徒たちが第1志望の高校に合格しました。「継続は力なり」。毎日英語を書き続けることで、本当に「書く力」は高まります。



学習指導要領の改訂を踏まえた教科指導

—ライティング指導の実践—

佐賀県唐津市立馬渡中学校教諭 金丸 大樹



1. 学習指導要領の改訂

ご承知の通り、平成24年度から中学校の新学習指導要領が全面実施となる。外国語科は次の4つの基本方針にもとづいて改善が図られている。

1. 4技能を総合的に育成する指導を充実させる。
2. 教材の題材や内容についても4技能を総合的に育成するための活動に資するものとなるように改善を図る。
3. コミュニケーションの基礎となる文法や語彙の指導を充実させる。
4. 小学校での外国語活動を踏まえて、4技能の指導を見直す。

このような学習指導要領改訂を踏まえての自分の授業実践を、ライティングの活動に絞って振り返り、見つめ直し、よりよい授業へのステップアップを図る機会としたい。

2. 「書くこと」への恐怖

現在私が受け持っている生徒の現状を見てみると、書くことに対して恐怖感を持っているように思われる。英文が書けない原因として、限られた語彙力や文法の理解度の低さが挙げられる。しかし最も重要な原因は書くことに対する意識である。自分の知っている語彙や文法を駆使して、何とかして自分の考えを伝えようとする意識よりも、完璧を求め過ぎて何も書けなくなるということがよくある。特に自由英作文では空欄が多い。文法的に間違っていないか、これで本当に読み手に伝わるのかという不安感を抱いたままでは、筆はなかなか進まない。また誤答としては、2, 3年生とも時制の間違いや3単現のsのつけ忘れ、前置詞、語順の間違いなどが多い。

3. 意識の転換

子どもたちの「書くこと」に対する恐怖を取り除くために私が取り組んでいることは、子どもたちに書く経験を積ませることだ。毎回の授業の帯学習として2分間の「書く」活動を取り入れた。

初めは3学年とも単語の練習や教科書本文の視写、目標構文を使って思いつくだけ文を書かせるなどを行った。現在1年生では「色」や「動物」などテーマを決めて書けるだけ単語を書かせて語彙を増やそうとしている。この活動では辞書引きも交えて行っている。今後は家族の紹介などが書けるように練習をさせる計画である。2年生では日記を書く活動を通して、様々な動詞の過去形の習得に留意している。今後は教科書に登場する基本構文に合わせて、「一番好きな○○」などのテーマで書かせる計画である。3年生ではニュースの記事などをテーマに自分の考えを書かせたりしている。今後は作成した原稿をもとにディベートなどの活動もしていこうと考えている。

1年生は、今の段階ではまだ変容は確認できていないが、2, 3年生は昨年と比べると自信を持って書こうとする意識が見え始めている。テストの英作文問題では空欄が少なくなり、生徒との対話の中でも、「今日のテストの英作文は書けました」「あの英作文はこう書いてよかったとですか」などの言葉を聞けるようになってきた。

4. 課題

今後の課題としては、3年間を見通して系統立てたライティングの指導が必要である。大喜多(2004)による「制限型」「誘導型」「自由型」の活動のうち、1年生の段階では「制限型」から「誘導型」への移行、2年生の段階では「誘導型」を中心に「自由型」を取り入れ、3年生の段階で「自由型」を深めていけるよう計画をしていきたい。また、書く活動を通してコミュニケーションの基礎となる語彙や文法の指導をしていかなければと感じている。

参考文献

- 大喜多喜夫.(2004).『英語教員のための授業活動とその分析』昭和堂
菅 正隆・中嶋洋一・田尻悟郎(著).(2004).『英語教育ゆかいな仲間たちからの贈りもの』日本文教出版
松畑照一.(1989).『英語授業活性化への教材研究』開隆堂出版

第59回 中村英語教育賞 入選論文発表

第1位：該当者なし

第2位：The Methodology of Making up for Students' and Teachers' Perceptions Using the Effect of Cooperative learning. ～新学習指導要領を踏まえて～
佐賀県立白石高等学校 石橋 俊

第3位：異文化理解教育の可能性の検証
—中学校英語教科書における文化題材から—
愛媛県立中山高等学校 大川 光基

◆ 審査員 ◆

佐野 正之(審査委員長・横浜国立大学名誉教授)
山岡俊比古(同副委員長・兵庫教育大学教授)
白畑 知彦(静岡大学教授)
高梨 芳郎(福岡教育大学教授)
萬谷 隆一(北海道教育大学札幌校教授)

概 評

審査委員長 佐野 正之

今回の応募論文は6編でした。高校の授業を英語で行うことに関するもの4編、異文化理解に関するもの1編、小学校での文字指導に関するもの1編です。いずれも、教師ならではの問題意識から考察していて、その点は高く評価できます。これからの教師は、教科書を教えることに終始すべきではなく、よりよい指導法や教材を採求するResearch Mindを持つことが期待されているからです。

審査委員は全員で6編の論文を精読し、テーマの「独創性・発想力」「内容の充実度」「構成力」「表現力」「応用性・実用性」などの観点から一次と二次の審査を行い、上記の2編を入選としました。残念ながら、一位論文がないのは、いずれも「優れてはいるが、欠点もある」と判定したからです。その一方、他の4編にも見るべきものがあり、入選作との差はわずかというのが今回の特徴でした。

第2位の石橋論文は、「授業を英語で」を実施するには、講義形式ではなく協同的活動に比重を移すべきだという主張を実践し、成果を数値的にも検証したもので興味深い内容です。ただ、実践の状況や経過の説明が不十分だという指摘がありました。3位

の大川論文は、異文化理解という視点から教科書を緻密に調査した点は評価されるが、出された結論がユニークさに欠けるという指摘がありました。今後の一層の努力を期待します。

審査委員が共通して指摘した改善点は、「論文には読者を説得する論の展開と検証が必要だ」という点です。それにはまず、問題の明確な定義が必要です。「授業を英語で」を例とすれば、文献研究をもとに具体的に定義し、一定期間の実践の経過と調査結果を論理的に考察して結論を出すことが必要です。ところが、応募作品には、テーマは興味深い、指導の工夫の羅列で終わったり、定義が厳密でなく、文献研究も不足という傾向が見られました。また、所定の長さを超えたため、低く評価された論文もありました。逆に、入選は逃したが、このまま実践を継続し、検証を充実させ、論文の形式に整えて再度応募してほしいと思う作品もありました。是非、チャレンジしてください。

多忙化する学校の中でも、教師としてのプロ意識とプライドを守るには、実践的研究が不可欠だと信じます。皆さんの健闘を祈ります。

講 評

審査副委員長 山岡 俊比古

この講評では、入選した2つの論文について、それぞれその内容を解説し、評価について述べます。

石橋論文

〈内容〉

本論文は、今回の論文募集において指定された課題の1つである「英語で実施する英語授業の実践的研究」に対応するもので、平成24年度から実施すべくすでに公示された高等学校の新学習指導要領の外国語編に謳われた「授業は英語で行うことを基本とする」ことを見据え、それを現行の指導要領の下で行われる「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」「リーディング」の授業において先取的に実践し、その効果を考察したものです。

著者の基本的なスタンスは、教師は新学習指導要領に謳われるコミュニケーション重視の授業を求められる一方で、生徒は大学入試を目指し、文法や読解を中心とした授業を求めるという両者の現実的な溝を埋め、両者のニーズをともに満たすためには、グループによる協働学習を促すグループ活動を行うのがよいとする認識にあります。

本論文の主旨は、それぞれの授業においてグループ活動による協働学習をどのように実践したかを報告し、その効果を示すことにあります。

「英語Ⅰ」では、最初の20分で新出語の確認と音読及び本文の音読を行った後、残りの30分をグループ活動に当て、本文の内容確認、内容の図式化、本文内容に自分の意見を加えたとえでのディスカッションをそれぞれグループ内で行った。ディスカッションでは、疑問はすぐに相談することとし、話し合った内容をノートにメモし、最終的にこれをきちんとした英作文として仕上げた。また、1つの課が終わった後、生徒個人が自分の意見を英作文し、Peer Revisionを通してグループ内で相互に英作文を直し、最後にこれを発表する表出活動を1、2時間かけて行った。

「英語Ⅱ」は、上で紹介した「英語Ⅰ」を経験したクラスのさらなる展開として行われたもので、

毎時間のグループ活動としては、本文の内容確認と内容の図式化を行い、課が終わるごとに、その課の内容に関係するディスカッションやディベートを行った。生徒はそのために大量の英文を読むことになった。その後、宿題としてLesson Reportの英作文を行い、Peer Revisionを行った。

「リーディング」は3年生対象で、毎時間、まず単語テストの後にその単語を使ったControlled Speechをペアで行い、その次にグループで本文に関連する一般的な問題について話し合い、出てきた意見をメモし(これは後で全体で発表)、続いて本文を使ったグループ活動として、内容理解のための問題検討を行った。課の最後に1時間取り、各パートの要約を作成し、これを発表した。

各授業の効果は、校外模試(平均得点の向上)、英語検定試験(級ごとの合格者数の増加)、作文力(総語数と正しい文の数の増加)、アンケート(英語が好きになった生徒数の増加等)のそれぞれを通して説明されており、結論として「グループ活動により、受験を意識しながら同時にcommunication活動を行うことができた」と述べています。

〈評価〉

本研究は複数の授業における年単位の取り組みであり、その結果は「学校全体が英語一色になった感じがした」ほどの成果を上げたと言えます。これは敬服すべき成果であると言えます。しかしながら、研究論文としてはいくつかの問題点を指摘しなければなりません。まず、肝心の英語使用について、「リーディング」で「英語を使用するように強く指導を行った」とあるのみで、実際はどうであったのかははっきりせず、他の授業のグループ活動でも英語がどのようにどの程度使われたのか不明で、その効果が確定できません。また、グループで行った活動が多岐にわたり、どれが効果的であったのか見極めができなくなっています。そもそも、提示された効果がそれぞれの授業固有のものなのか、生徒が同時に受けたと思われる英語の他の科目との共効果なのか区別ができません。

本論文には生徒の活動風景を写した写真が5枚

異文化理解促進のための YouTubeの活用



秋田大学助教 濱田 陽

添えてありますが、本文内容との対応関係が明確でないため、宙に浮いた印象を与えます。また、本文で取り上げた文献で文献リストに載っていないもの、文献リストにあるが、本文で扱っていないものがあるのは、論文の基本ルールからの逸脱です。今後論文を執筆されるときには、是非ともこれらのことに留意していただきたいと思えます。

大川論文

〈内容〉

この論文は、平成17年度版の6社の中学校英語教科書すべてにおける文化題材を、異文化理解教育の可能性を検証する観点から分析したものです。同じテーマの先行研究を整理し、そこに見られる問題点を踏まえ、本論文では以下の研究課題を設定し、並記した分析結果を得ています。

①量的分析

- ・文化題材の割合
学年による差はあまりなく、どの学年も全体の6割前後が文化題材を扱っている。
- ・文化題材内容のカテゴリー
1年では日常生活・伝統文化が多く取り上げられ、2年と3年では風俗習慣・地理・歴史が多い。全体的には、風俗習慣が断然多く、次いで地理・歴史・伝統が来る。
- ・文化題材が扱う国・地域
1年では英語を母語として使っている国を扱う割合が多く、2年になるとその割合が減り、英語が外国語として使われている国を扱う割合が増えており、3年では英語が外国語として使われている国の割合がさらに増している。全体的に、英語を第2言語として使っている国を扱う割合は非常に少ない。
- ・顕在文化と潜在文化の割合
各学年においても、全体的にも、顕在文化が大半で、潜在文化の割合は非常に少ない。しかし、その扱いは1年では0%、2年では7.5%、3年で15.2%と、わずかながら学年を追うごとに少しずつ増えている。
- ・文化題材の意図・ねらい
1年では他文化理解の割合が圧倒的に高く、2年になるとその割合は依然として高いものの、

自文化理解の割合が増えてくる。3年になると他文化理解の割合は高いが、自文化理解の割合が減り、比較・対照の割合が増えている。全体的に、他文化理解のための教材が圧倒的に多く、次に続く自文化理解と比較・対照のための教材は2割未満に留まっている。

②質的分析

質的分析においては、具体的に6つの教材(アイヌ文化、国際語としての英語、言語の多様性、若者文化、潜在文化、日本文化)を取り上げ、それぞれその内容を紹介し、その内容が持つ異文化理解としての価値を確認している。

〈評価〉

本論文は、6社の中学校英語教科書をすべて対象とし、異文化理解の視点から、多岐にわたる観点を含めた量的な分析に加えて質的な分析も行い、全体的な特徴を明らかにしています。その結果は興味深く貴重なものとなっています。しかしながら、研究論文として見た場合、以下のことを改善点として指摘することができます。まず、記述が包括的で、重複的になっています。書き出し部分の学習指導要領の内容確認、教科書の役割についての議論などは、まるで一冊の本の導入部分のようであり、量的分析で示される同じ内容の表とグラフを並置したうえでの説明も本を読んでいるような印象を与えます。分量制約の少ない本と、決められた分量内に収めるように内容を凝集させた論文は書き方を異にします。分量内に収める筆力は論文執筆能力の基本です。次に、せつかくの質的分析が、個別教材の個別的紹介に留まっている印象があります。何らかの共通性や一般性の追求が求められるところです。また、6社の教科書のそれぞれが持つ特徴の分析に踏み込んでいない点も残念な気がします。最後に、著者自らがこの研究の意義として述べている異文化理解の指導方法の可能性の考察にまで論が及んでいないという憾みもあります。今後は、このようなことに留意され、より質の高い論文を執筆されることを望みます。

※各入選論文につきましては、開隆堂出版webページにて掲載しております(<http://www.kairyudo.co.jp>)。

1. はじめに

Authentic Materialの使用については賛否両論があるが、異文化理解や言語観の育成を目的とする場合には特に有効だと考えられる。また、パソコンを使用すると普通の授業スタイルに変化が生まれ、生徒のモチベーションが高まる。さらにヒット中の歌手の題材を用いると、洋楽への興味・歌詞への興味・さらには文化への興味など、教師が予測できない範囲まで効果が見られることもある。結果として、数字だけでは立証できない効果も期待できる。そこで、簡単にできる、私が高校教員として実際に活用した内容・活動を紹介します。

2. 使用する機器

教員用パソコンとスクリーン。可能であれば各生徒が一台ずつパソコン画面を見ることのできるコンピュータ室などの環境が望ましい。

3. 事例

(1) アメリカ公民権運動の紹介

キング牧師については多少の知識を持つ生徒もいるが、公民権運動についてはほとんどの生徒が無知である。1960年代のアメリカのRosa Parksから始まる様々な動画が入手できる。人種問題についての言及・演説方法・Ebonics(黒人英語)を出発点とした英語の多様性についての学習に発展することも可能である。

(2) 曲を使用した言語観の育成

- ①DREAMS COME TRUEの“LOVE LOVE LOVE”の英語版と日本語版を使用する。
- ②英語版をdictationや穴埋め教材として用意し、音素を聞き取る訓練を行う。
- ③生徒が歌詞を聞き取った段階で、その歌詞から受ける印象を自由記述させる。その後、日本語版を聞かせ、同じように、その歌詞から受ける印象を記述させる。
- ④その印象の差を生徒どうして話し合わせること・英語で討論させること・ディベート形式に発展させること・教員がまとめることなど、生

徒の実態に応じて様々な方向に広げることができる。

- ⑤結論として、同じ歌手が同じ曲を歌っていても、言語によって受ける影響が異なるということに気づき、その理由について考えることができる。

(3) 話題の歌手のPV(Promotion Video)を利用

- ①Taylor Swift(2010年グラミー賞4部門受賞)のヒット曲“You Belong With Me”のPVでは、若い世代の恋愛をテーマにしたストーリー性のある動画に合わせて曲を聴くことができる。
- ②動画を見ながら、必要に応じてメモを取らせ、1、2回見た後にペアワークにて英語でストーリーの流れを確認させる(英会話)。
- ③クラス全体でストーリーをまとめる活動をする。この際、ストーリーのrewriteというwriting活動に発展させることも可能である。
- ④次に、歌詞を使用し、dictation、穴埋め、あるいは文法解説に発展させることも可能である。また、日本人にはなじみの薄いCountry Musicの概念も紹介できるうえ、発音の訓練も行うことができる。
- ⑤Taylor Swiftには他に*Romeo and Juliet*を題材にした“Love Story”のPVもあり、*Romeo and Juliet*のやさしいReading教材と併用できる。

(4) 生徒の反応

- ・人種問題については全く無知であったのが知ることができた。Ebonicsの存在を知って驚いた。
- ・同じ歌手なのに言語が違うだけで受ける感じが違って、新たな発見だった。英語版と日本語版を聞いての印象では、はっきりと違いが見られた。
- ・「“You Belong With Me”の歌詞覚ええました！」という思わぬ波及効果も現れた。

新たな視点からの題材だったこともあり、授業を楽しみにする生徒が増えた。

中学1年生の指導

この4月から6年ぶりに中1を担当することになった。前回受け持った中1との大きな違いは、小学校で英語を習ってきている点である。これまでも、小学校低学年で英語教室に通っていたとか個人レベルのことはあったが、今回アンケートをとって見たところ、『英語ノート』を使用した、「英語劇を演じた」などの回答が散見され、これは初めての経験であった。実際、初めてのチーム・ティーチングでNice to meet you.などの表現を使って自己紹介をお互いにさせたところ、非常にすんなりとペアワークを行い、驚かされた。

これまで中1を担当したときには、1学期中は音声を中心にし、文字の導入は1学期の後半に回してきた。しかし、今回の中1は、筆者がそれまで1学期中にやってきたことを小学校でやってきたようであった(もちろん、小学校英語の正式導入の前であり、英語を学習していない生徒がいることを忘れてはならないが)。というのも、『英語ノート』は文字を最小限に抑え、イラストとCD教材によって生徒の英語理解を促し、曜日、月名、数字、教科名などの語彙になじませ、活動としてはI can..., I want to...など、1・2人称に限れば中2の途中くらいまでの文法項目に触れさせていることになるからである。

そこで、今回は音声としてある程度入っている知識を確認しつつ、いかに文字と結びつけていかに焦点を当ててみた。カタカナ語などの導入をきっかけに、たとえば /æ//ʌ/の発音の違いを徹底させ、文字の上では典型的にはaとuで区別されることなど、いわばインフォーマルな形でフォニックスを意識した指導をしたわけである。

はじめは順調に文字化できているように思われたが、文レベルで書かせてみると、音声化しているものが必ずしも理解を伴っていないことがはっきりとした。They areがThey a とつづられていたり、his nameがhe is nameだったりする例が見られたからだ。

考えてみれば、入門期の生徒にはbe動詞とか代

名詞の所有格というような概念はないのだから、音が似ている場合には同じものとしてとらえてしまっても無理はない。そこでbe動詞のような機能語はカードにして印象づけながら導入する、というような工夫が必要だと思う。音声化できるから理解もしていると思うのは早計である。ただし、これは音声による導入を否定するものではなくて、あくまでも口頭で導入しながらも、最後は文字で書くことによって定着を図る、ということである。

学期末には筆者とAETとで手分けして、個々の生徒にインタビューを行った。Where are you from?とかWhat is your favorite subject?など、チーム・ティーチングで扱ったような表現を中心に質問した。知識としてわかっていることと実際に口に出して言えることは別物であって、やはり日頃からまず口頭で言うてみることの大切さを実感した。

もう1つの口頭課題は、ラジオの『基礎英語 1』(4月当初から聞くように指導し、授業でも時々扱ってきた)に関するもので、登場人物のTaroとDocについてのエピソードを筆者が英文にまとめたものを、黒板のイラストを頼りに英語で再現(Oral Reproducing)する、というものである。

期末考査でも同様のイラストを見て英語で書かせるという問題を出したこともあり、イラストを指しながら、聴衆のほうに視線を向け、英語らしい発音で発表するという3点を意識したプレゼンテーションを行わせることができた。

中1の1学期は単に英語の入門期であることに留まらない。音声による導入後に文字に移行すること、口で言えるようになってから書くこと、などこれからの学習スタイルの確立の機会でもある。これらのことを念頭において指導したい。

(筑波大学附属駒場中・高等学校教諭 八宮 孝夫)

投稿を歓迎します

英語教育に関する問題提起、実践報告、研究などの投稿をお待ちしております。締切は特にありませんが、本誌は今後、2012年1月、3月、5月、9月にそれぞれ発行の予定ですので、原稿到着の時点で掲載号を決めさせていただきます。規定は以下のとおりです。ご不明の点は編集部までお問い合わせください。

- ① 22字詰×72行以内(本文分量)
- ② 二重投稿はご遠慮ください。
- ③ 採用分には薄謝を進呈いたします。